

放送人の会

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階

Tel&fax 03-3221-0019 E-mail info@hosojin.com

代表幹事 今野勉 編集担当 磯村健二、伊藤雅浩、鈴木典之、長沼士朗、松尾羊一

創立十周年を迎えて 代表幹事 今野勉

新年おめでとうございます。

放送人の会の発足は、一九九七年の十二月でした。ことしの十二月が、創立十周年ということになります。十周年だから何か特別のことをやらなければいけないという会でもないのです、今のところ例年のように粛々と活動していききたいと思っています。

もつとも、発足の時に、初代会長川口幹夫さんが「放送人の会の活動は勝手連でやればいい」と発言したように、会員や幹事の皆さんが、十周年に何かやろうということであれば、それはそれで歓迎すべきことと思います。

十周年を迎えようとする放送人の会の現状を見てみますと、発足時には予想もしていなかったような多くの事業が行われています。概要については各委員会の近況報告を読んでいただければ解ると思いますが、いずれも内容として濃く熱いものでした。二、三の例を挙げますと、「名作の舞台裏」の「大地の子」の回での、脚本岡崎栄さん、プロデューサー河村正一さんの話は、中国のスタッフや俳優さんたちとの、あるいは主演上川隆也さんとの胸の熱くなるような秘話でしたし、また、「人気番組メモリー」の「ニュース・ステーション」のプロデューサー小田久栄門さんの話は、報道番組の新天地を拓いた放送人の、肅然とす

るような吐露でした。また「放送人の証言」で証言して下さった方々の中には、私が個人的に親しくしてよく知っているつもりの人もいたのですが、あらためてその人の証言を聞いて、実は私はその人のことを何も知らなかったのだと反省し感銘を覚えたりもしました。

過去のことばかりではありません。「INTERBEE」恒例のシンポジウム「ジャーナリズムを担うものは誰かー放送とインターネットII」では、吉永春子、金平茂紀、神保哲生さんらの、体験を踏まえた未来への鋭い踏み込みに、司会の私は大いに刺激を受けました。

こうした私個人の体験もあって、折あるごとに私は、会員の皆さんのイベントへの参加を呼びかけてきたのですが、あるとき、ある会員の方がこう言っている、と聞いて、なるほど、と思ったことがあります。その方は「いろんな事情で会のイベントへは参加できないですが、会費を払っていいことで会の活動を支えているのだという誇りと喜びがあるので、私はそれで満足している」と仰言ったということです。

会費で、というより、会費という形を借りて、精神として会を支えているのだ、という意味だと私は受け取りました。こうした精神的バックアップがあつての放送人の会なのだ、私はあらためて意

を強くしました。

とはいえ、会費はもろろんのこと、参加も多ければそれに越したことはありません。物心両面での参加を願うや大であります。

今後の課題はいくつもあります。会員の高齢化は、次世代の新入会員を必要としています。地方会員との交流も懸案です。来年の日韓中テレビ制作者フォーラムを突りあるものにするための手だても考えなければなりません。

何よりも、現状の放送文化の状況をどう捉え、どう私たちの志を発信していくのか。次世代の放送人たちに、何をどのように語りついでいったらいいのか、そのことを胸に、ことしも、活動していきたいと思っています。よろしくご参加のほどを。



版画・伊藤視郎

〇七丁亥年賀状

ミニ・シンポ担当 中澤 忠正

世の中に「会」と名のつくものには無数にあるが、大別すると、愉快なのと不愉快なの、この二種だ。形をハミ出した自由な発想で新しいものを生み出す場となるのが前者。後者はモノゴトを形に押し込めるのが目的である。

放送人の会というのとはとも形なんて考えていない会だ。愉快でないはずがない。なのに実情はなかなかそうなっていない。会員たちが自由な発想をぶつけ合える場を持っていないのが原因ではないか。じゃあ、それをストレートに目指そう、というのが「会員ミニ・シンポジウム」です。

毎回一つテーマを決め、主たる話し手を囲んで、自由な発想を存分に絡み合わせる。会の鉄則は、常識に流されず真剣に考えること。これで新しいものが何も見えてこないようなら、生きるのやめたほうがいいかもよ。

「放送人の証言」担当 久野 浩平

今年の「放送人の証言」収録は一月十一日、TBSドラマの鴨下信一さんから始めます。このあと一月以降「証言」を頂く予定になっているのは、創成期の「題名のない音楽会」のプロデューサーだった元テレビ朝日の牛山剛さん、テレビ開局期からの「衣裳さん」元NETの栃木始さん、近々お願いしたいと思っ

スケジュールなど交渉中が元TBS報道の吉永春子さんです。放送人の会幹事の皆さんからも斉明寺以玖子さん、今野勉さんなど「証言」を頂く予定です。松尾羊一さんにも開局直後の文化放送の思い出など語って頂きたいものです。

現在「証言」の収録数約百十人、会員の皆様からも「証言したい、してもいい」「あの人の証言を収録すべきだ」という声をどんどんお寄せ頂いて「放送人の証言」がより充実することを希っています。

ラジオ部会担当 石井 彰

昨年十一月二十六日、放送人の会にも協賛いただいた「ラジオの会・ラジオ制作者セミナー」が、JFNセンターで四十人余りが参加して開催された。

ラジオの会は、主にラジオドラマの制作者や脚本家が集まり、セミナーなどを開いて交流を深めてきた。

今回は放送人の会・会員でもある東北放送の木村成忠さん、TOKYO・FMで異色なジャーナルな視点に立つ番組を作っている田中美登里さんを講師に招き、お二人が制作した番組を聴いてラジオドキュメンタリー作りの話を伺った。

テーマや構成を工夫すれば、音の世界で素晴らしい番組を作ることができることを、実感することが出来た。

ラジオの活性化をはかるには、先人の知恵と工夫を、どのように継承していくかが重要な鍵となる。

ラジオ部会では、こうしたラジオ制作技術を継承し深めていく動きを応援し

ながら、現場で日夜奮闘する制作者に実のあるエールを送っていききたい。

事業委員会担当 石橋 冠

「マグロ」という五時間ドラマは、終わってみると単に格闘技だった。撮影スケジュールの殆どが津軽海峡の波の上で「古稀」を迎えて漁師をやるとは思ってもみなかった。いい経験だったが、虚脱状態の正月だった。

その所為か、初めて人生について考えた。意欲とか体力とがあまりに反比例してきた。怠惰を合理化する術が急速な進歩をとげた。さて、どうするか。

やれること、やるべきこと、やった方がいいこと、これらを粛々と整理してみた。結論を出すことは凡夫には無理だが、二つだけ決心した。

ひとつは、この会に若い力を導入するため積極的に動くこと。もうひとつは、仰ぎ見た久世光彦氏を喪った今、かつて彼と小声で囁きあったホームコメディの復権に、真剣に取り組もうということ。蛇足だが、大言壮語も控え目に、である。

総務担当 北村 充史

年明け早々、会費納入のお願いを発送させていただきました。納入状況に依じて三種類のお手紙と振込用紙を差し上げております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

総務委員会の今年の目標は、総務委員を複数にすることです。現在小生一人しかおりませんので、まず村木良彦氏には

「放送人グランプリ」のまま総務兼任をお願いし、現在「日韓中テレビ制作者フォーラム」の経理担当の山田尚氏に総務兼務をお願いしたいと思います。幹事で総務委員をやってもいいという方は、事務局または北村までご一報ください。今年も当会発足十周年になりますので、何かやりたいことはございませんか。総会は、会場の都合で五月十二日(土)(表参道・NHK青山荘)になりそうです。よろしくお願いいたします——というふうにご連絡・雑用・経理一切を掌るのが「総務」であります。

広報担当 松尾 羊一

亥の日から猫の居所高くなり旧暦十月の亥の日には、炬燵を出して亥の子餅を食べる。江戸時代のそんな風習を詠んだ古川柳だが今より寒かったのだろう。家猫は気配を察して早速縁側から炬燵の上に引越しては高みから家の有り様を睨めまわす。

「猫が見ても視聴率」とは、国会は通信委員会に呼ばれた高峰秀子さんの名言である。当時は「裏番組をブツとばせ！」などが「俗悪番組」と批判されていた頃だ。

当節では薄型テレビが主流だからしてお猫様も登りにくい。ネットにゲームにケータイの平成のご時世では、さすがの猫も見放し、ついには「ヒトが見ても視聴率」といった反語的装置になりかねません。猫なみに軽くなったヒト族相手のテレビに未来はない。

デジタル時代を前にして新しい「亥の

日」の視聴習慣を付加できないものだろうか。第一、テレビは登るものじゃない、本来は正面から受け応え、直視するものだから。

「会報」も、そんな手立てをまさぐり、皆様のご意向に思いをいたすように、本年も編集に邁進し、皆様の玉稿をお待ちしております。(ニヤオー！)

石井 清司

昨年はNHK問題を含め、「テレビを考える集い」を何度か主催しました。今年もお誘いして参ります。昨秋、市民が自由のために死闘した韓国光州市を訪ね、詩人、金芝河氏と会い、心を新たにしました。一九八〇年の「光州事態」の前、軍事政権に投獄されていた金芝河氏宅を原州に訪ね、ご家族と会って三十年近く経ちます。もうひとつ、金沢市で秋声、鏡花、室生犀星、五木寛之の各文学館を巡り、エネルギーをもらいました。折々情報をお送りください。どこかで又お会いできますことを。

伊藤 雅浩

年金についてTBSと裁判で争ってきましたが、今年早々に解決できそうです。争ってみるとTBSは公共性をかなぐり捨て、嘘、ゴマカシを平気で言う企業だと思いがちでした。長年愛してきた会社ですが、これからはTBSの番組をひいき目なしで見ることが出来ます。

市岡 康子

昨年はゼミ学生の作った映像作品が

「ゆふいん文化記録映画祭」で上映された上、その中の一つで中津市の伝統神事古舞を記録した作品が、「地方の時代映像祭」の「市民・自治体・CATV部門」で優秀賞を受けるなど、五年間のゼミが実ることになりました。わたしも達成感をもって大学の任期を終えることができ、嬉しく思っています。

宇野 昭

眼・耳・歯など末端器官の劣化・老化と収入の悪化で「放送人の会」の活動も会費未納の状態。「休会」中というのはないのかなアなどと落ち込んでいるが、幹事定年でこれ亦2年程休止中断中のD・N・N、本日(二月九日)五味大幹事の奔走で二十六日(金)一八・〇〇と決定。ようやく新年の挨拶だけは出来るようになった。

遠藤ふき子

明けましておめでとうございます。ラジオ深夜便の担当も十五年目。「母を語る」のコーナーは九十二年、百三十二人の方に出て頂きました。沢山のご縁に支えられ感謝感謝です。今年も健康と頭の回転に気を配りつつ皆様に心地よく眠れる時間、安心をお届けしたいと思っています。

大山 勝美

暮からの風邪が長びき完璧な「寝正月」でした。本では「黒沢明vsハリウッド」(田草川弘・文春)が断然面白かった。黒沢の書いた初稿でアメリカが誉

めたいくつかのシーンは、さすが。やはり彼に撮らせたかった。

「忠臣蔵―瑤泉院の陰謀」は、下支えの女性たちが、舞台上では屋台をまわしていたという視点がユニーク。「京都映像」の表現力にも脱帽。

「マグロ」の後編も、クライマックスは手に汗でした。石橋冠さんご苦労さま。NHK・BSの、「民衆が語る中国・激動の時代」文化大革命を超えて「連続四回もようやく中国民衆が、用心深く本音を外国メディアに語り始めたというインパクトあり。

グダグダ病から抜け出せず困りつつも、皆様、新年の御慶めでたく申し納めます。

荻野 慶人

鶴橋康夫君の映画『愛の流刑地』に年末の試写会で魅了され、正月早々は石橋冠君の『マグロ』前後篇五時間に圧倒された。二月は堀川とんこう君の『李香蘭』、これも二夜連続の大作だ。

この三ディレクターに札幌テレビの現役局長・林健嗣君を加えた「名作の舞台裏」チームの企画会議を図るのだが、顔を揃えるのは至難の業である。

一番暇な僕が往復葉書と電話で調整し、漸く一月一八日に新宿の珈琲店で侃侃諤諤できることになった。過去の名作論議の前に、渾身燃焼の余熱が再び沸騰するのは目に見えている。

それぞれに「貴君の心の師匠は誰?」と訊ねてみよう。反面教師でもいい。一年三回の企画はその場で決まる。

林氏にインタビューをお願いして、ゲストの出演交渉や雑事は僕が引き受ける。初夢が正夢になるか…?

各務 孝

暮れから正月にかけて、エリス・クラウスの「NHK vs 日本政治」とグレッグ・ダイクの「真相くイラク報道とBBC」を読む。前者はアメリカの政治学者がNHKニュース報道の分析を通じて、メディアと政治、特に、日本における公共放送のあり方と自民党による一党優位の政治体制の微妙な関係を描き出している。NHKニュースの中立的な事実報道中心の非論争的報道姿勢は何に起因するのかの分析は的確で説得力がある。一方、後者はイギリス放送界の風雲児と言われた前BBC会長のダイク氏が大量破壊兵器をめぐるイラク戦争報道事件で政府と対立し辞任に追い込まれるプロセスを歯に衣着せず、自由奔放に活写した興味尽きないドキュメントである。時の政権与党が政府の政策に批判的な言論を好まぬのは、洋の東西を問わない。要は、政府や与党の圧力に対して、公共放送の当事者がどう対処しているかこそが問われる点であろう。

その点、自らがかつて、熱心な労働党黨員であり、トニー・ブレアに政治資金を援助してきたダイク氏がBBC会長として大量破壊兵器をめぐる政府の情報操作を暴いた報道記者の活動を擁護し、官邸からのBBC批判をかわしぬいた姿勢には脱帽せざるを得ない。ともあれ、両書とも現在、抜本的な改革を迫ら

れているNHKの在り方に多くの示唆を与えるものであることに間違いはない。

片岡 敬司

NHKドラマ部大阪から東京に戻りました。

川竹 和夫

マッカーサーが「老兵は死なず」といった齢を遥かに越えたのですが、まだ「消え去らず」テレビ国際調査のプロジェクトの世話係を続けています。今年も『日本と韓国との、テレビ・新聞の相手国イメージ調査』を予定しています。日韓関係の微妙な表裏が見えると良いが、と期待しています。

放送界の問題としては、やはり、政府介入の動向が見えて来たNHKの将来と、通俗化の度を強める民放番組の現況が気になります。また、テレビの世論誘導作用が顕在化してきたことも注目しています。

勝部 領樹

国には凛々とした姿と形を求め人には弱者の側に立とうと言います。皆さまのご健寿安全の年を祈り、貴方の自己史を確かめて乾杯を。

中陽 太郎

あけましておめでとございます。[目には目を齒には懷中電灯フセイン大統領]といういろはかるたを作ってイラク戦争に抗議したのはたった二年前なのに。

昨年は碧川るり子脚色主演の拙作ミュージカル「ラ・メール」上演に際しては皆様のおおきな協力をいただき感激しました。今年も三月十七日名古屋のヤマホールで「絶滅種テレビを発掘する」という舞台と映像のコラボを企画しています。

キリスト新聞に「ガリラヤ湖の市民運動」を発表します。聖餐のオープンを主張しています。

二人ひとりのマスコミ3月刊行予定(創森社)です。

勤務先、星槎大学、芦別小学校のあとを校舎にし、LD支援教育にも力を尽くす通信制大学。名古屋経済大学短期大学部放送コース、犬山にあります。今年がよい年であります様に。

齋明寺以玖子

晩秋から無熱肺炎に立ち往生、正月が来ないという稀な体験の後、漸く人心地に還りました。

今は、ゆつくりじっくり、実のある一年にしたいと切望します。孫たちに決して武器を執らせない為にも。

寒河江 正

新年六日、三十年も続いている或るホームパーティーに今年も参加させて頂いた。渋谷の自宅を開放して開かれる新年会は、先ず主催のIさんとお嬢さんの手作りの華やかな料理が目を楽しませてくれる。

時間は午後二時から明け方まで開かれ、好きな時間に自由に参加できるオープンハウスのパーティーである。今と

なつてはこの形式のパーティーは一般的だが三十年前よりこの外国式パーティーを開いているのだから驚きだ。主催のIさんが如何に海外生活に精通しているか伺える。およそ五十人から六十人、多彩で個性的な参加者である。大学教授、デザイナー、作家、若手女性刑事、画家、編集者、写真家、映画監督、私を含めた放送人等、職種を超え、同じ空間と時をゆつたり楽しむ。三十年前、中学生だったお嬢さんの同期生が参加していること、この会には、中年、若者世代の参加者も多くなってきた。しかしその違いはこの会では感じられない。歴史認識、高齢少子化、いじめ、地球環境、ITと話題は多岐にわたり、会話は時間を忘れて続く。本音で語り合えるこの会の魅力には、昨今私達の人間関係で忘れられている他人を尊重する精神を誰もがもっていることにあるのかもしれない。今年一年、又多くの人と出会いがあるだろう。この会で感じられた心地よい他人との関係をスタートに、素晴らしい一年となるよう過ごしていきたいと思

佐々木 欽三

新年おめでとございます。

年末年始の番組はあまり見ていませんが、たまたま目にした元日のNHK「知るを楽しむ、スペシャル」とりわけ岸恵子、田辺聖子が対照的で思わず引き込まれました。手の混んだドラマより面白い、トーク番組はやっぱり放送の原点だと思えました。

年末は邦画の「武士の一分」を見ました。これはまた凄いです。テレビはやっぱり映画にかなわないのだろうか、どんなに優れた番組でも、一カ月毎日再放送したら飽きられるだろうからと、そんなことを思ったりして：ごめんなさい。

嶋田 親一

長生きも芸のうちとか……

鈴木 典之

この正月は、会員諸兄姉の「城」に触れる機会が多かった。ドラマ、映画、著作など、それぞれが築いた「城」の重みが、小生にはずしりと応えた。

坂本 良江

『課外授業 ようこそ先輩』(NHK)の制作を五年担当しています。学校が窮屈になっていくのが少しずつ感じられます。「学校は小型の軍隊ではない」というA・Sニールの言葉を思い出します。多世代コレクティブハウスをよりよく運営していくための会社を仲間たちと一緒に作りました。コレクティブ・リビ

重延 浩

映画監督ビリー・ワイルダーは「年をとれば、時間が早くなる」と言いましたが、皆さんはいかがですか。「夢が思い出なくなったときが、老年だ」とも。まさに晩年のワイルダーの至言です。「私はライオンに食べられなくて済んだライオン使いだ」。これはいかにもワイルダーらしい皮肉な諧謔。でも、この言葉、最近しみじみと身に沁みる時がありますね。私が一番好きなワイルダーの言葉は映画『お熱いのがお好き』の「誰も完全な人はいないよ」です。あれは粋なワイルダーの哲学です。

という事で明るく、楽しい一年でありますように。

高橋 一郎

近況：TBSゴールデン枠、夜九時〜十一時の二時間ドラマ『遠い国から来た男』（脚本・山田太一／出演・仲代達也、栗原小巻、高野志穂、杉浦直樹）を撮りました。そのうち放送されると思います。

田原 茂行

今年発刊される予定の『全国テレビドキュメンタリー年鑑』（大空社刊）の企画・編集に参加します。

鶴橋 康夫

何とまあ、あられもない。おっぱいぼろぼろ、裸でんてん。なにやら愛嬌たっぷりだ。なに静謐、凜としている。このお調子者たちは何処から来て何処へ行くのだろう。と思わせて。

そんな映画、『愛の流刑地』が完成しました。初の映画監督作品です。またひとつ、光を見つけたような気がします。

長沼 士朗

去年の暮れ、クリント・イーストウッド監督の映画「硫黄島からの手紙」を見た。大方の批評のように、戦争の悲惨さを描いた秀作であったが、その中で一つ、私にはとくに強く印象に残った場面があった。

それは、日本の兵士がいざ突撃や、自決を決意するとき、指揮官から二等兵に至るまで全員が「天皇陛下万歳！」と叫ぶシーンである。

私には、戦前の国家神道に支えられた天皇制国家の体験は全くと云つていいほど無いのだが、このシーンからは、人間の倫理観や恐怖心さえもがそう叫ぶことよって消え去ってしまうという実感が、かなりのリアリティをもって伝わってきた。

その天皇が新憲法では神から人間に変わり、在り方も国民の象徴ということになった。それから六十年、日本の社会はこの変化をしつかりと受けとめ、新しい秩序を作り出していくことができたのであろうか。

憲法改定の動きが活発化する中で、今年には九条の問題だけでなく、こうした問題についてももう一度戦後史をしつかり勉強し直さなければならぬ、そんな思いが去来する新年である。

西川 章

初風の海峽をゆく舟疾し 阿舟

西沢 實

昨年は『へんな本』（上下）を上梓、江湖の御好評を賜り、更に例年の芸術祭参加話芸舞台では、念願の蕪村を上場、喝采を頂き、真に恵まれた年でした。本年もさらに良い脚本をめざし、猪突猛進の覚悟です。（齢 八十九歳）

林 健嗣

放送人の会のみなさま札幌から新春のお慶びを申しあげます。
東京赴任の身ですが、心はいつも札幌それが地方局に身をおく放送人としての志です。今年も、「地方」、「地方」と言い続けていく所存です。

そんな私、事情あって、今年の元旦は東京で過ごしてしまいました。「今年の正月は一緒に札幌で！」と再三の母親の声を耳をかさず、「元旦は東京で過ぎす！」と、ここ数年、札幌に帰って来なかつた息子と一緒の東京の正月です。

「東京の元旦の街が好きだ」と、帰省しない言い訳をしてきた息子の、東京の元旦の街は、不思議と感慨深いものがありました。静かな東京という地方の一瞬です。経済機能が停止すると素顔が見えてきます。資本の論理だけではない視点で、放送を語らねば、放送は守れません。

「放送は守るものではなくいまは、如何に連携するかだ」という放送業界関係者が増えています。今年も、規制改革の名のもとに放送法の大規模な改正案が示

される年。「地方局の甘えが、改革を遅らせている」という声には、徹底抗戦で臨みます。

みなさん、今年も、「地方」をよろしく。

藤久 ミネ

「時代の行列についていくな」と述べた林達夫の言葉を反芻しております。

堀川とんこう

今年は何だた様にも年賀状を欠礼してしまいました。

というのも、昨年の九月から二ヵ月半ほどロケーションのために上海に滞在、これが老骨には想像以上にこたえて、帰国後は編集と芸祭ドキュメンタリー三十五本の視聴でまさに青息吐息、這うようにして大晦日にたどり着いたという次第でした。撮影した「李香蘭」は二月十一日（日）十二日（月）の二回にわたって放送されます。日本のシーンもすべて中国で撮影。大群衆シーンもエキストラは全員中国人で、声を出すことのない沈黙の群集だったり、日本の家を見たこともない中国の美術スタッフが作った日本間が不思議な色をしていたり、こちらが付けたアドリブのセリフがいつの間にかとんでもない中国語になっていたり、珍事の連続でスタッフの苦労は大変なものがありました。

上海の周辺にある四つの大きなオーブンセットは、その規模のデカさ（紫禁城がそっくり建っています）、質感の良さ、スタッフの真面目さ、安いエキストラの豊富さなど、興味深いものでし

た。政治経済の面で中国が日本の脅威になることは明らかですが、映像産業についても、上海が世界の一大産地になる予感がしました。そういえば「華麗なる一族」のロケ隊といちどオープンセットで会いましたよ。

村木 良彦

昨年春、かわさき市民アカデミーで講座「テレビドキュメンタリー〜現在V」90分×13回を担当しました。夏、ハンガリー動乱50周年のブダペストを逍遙。

秋、川越最後の開催となった第26回「地方の時代」映像祭を盛会裡に終えました。今年から新たな場所へ移転して継続します。

冬、能登の西田記念哲学館を訪ね、荒海を眺めながら、西田幾多郎の親友であった祖父を偲びました。この5年間の大学と大学院での講義をベースに、テレビメディアアドキュメンタリー論をまとめます。

村田 亨

「遠くへ行きたい」を作り続けていますが、現在三十七年目です。放送人の会の人、評論家の人、いわゆる業界の人は「未だやっつてるんだ…」の一言です。早起きはそんなにつらいお年でない筈ですが、多分「昔は面白かったよね」で済ませて、三十七年も続いて視聴率も日曜日の朝10%を取っている訳を考えてみないんでしょね。

昔の様に旅人の個性を売り物にはし

ていませんが、日本の今を旅人がどう見たかを分りやすく、さりげなく伝えていく唯一の旅番組だと思っています。

自然環境、農業問題、過疎化…まあとご覧下さい。つまらなかつたらチャンネルを変えろ賢い10%の視聴者の一人になつて下さい。

八木 康夫

これからも「戦争」にこだわった作品をつくっていききたいと思っています。

藪内 広之

今年も大阪でドラマを作り続けます。ときどき東京でも作りたいと思います。みなさま、よろしく願います。

山路 家子

新年早々の電話は怒っていました。紅白歌合戦を聴いた友人からでした。「鼻濁音の出来ない歌手が多過ぎる」「このとばを大切にしていられっしやる○○さん」と紹介された歌手までなっていないのよ」。裸より大事件、そしてこれは、芝居の世界でも同様なのです。表現者として、ことばを美しく発音できないで恥ずかしくないのでしょうか。

一昨年の秋のテレビ小説など、テーマ曲の歌手の発音が耳障りで、内容に入るまで消音にしていました。担当者に手紙を出したら札状は届きましたが、まだ活かされてはいない様です。

「美しい国」は絵にも描けない餅、「空念仏」ですが、「美しいことば」は具体的です。

上原 直彦

沖縄はいま、製糖期の真っ最中。正月も、新旧暦の二度します。ラジオも二度特別番組を制作します。

グランプリ表彰以来、挨拶の遅れの非礼、ご容赦ください。三月四日は「ゆかる日まさる日さんしんの日」。沖縄中が九時十分、三弦の音で染まります。

（放送人グランプリ受賞者）

山田 尚

昨年の後半は、中部地方へ出かけることが多く、そこでこんな人たちに出会いました。

名古屋では、東山の荒れた森を里山へと三重では、汚れた勢多川を甦らせようと、静岡では、後退する中田砂丘を護ろうと仲間と協働、地道に体を動かしていた人たち。

「大それたことはできません。でも、私たちを見て、一人でも多くが、汚さないようにと思ってくれればいいんです」人を国を本当に愛し育んでいる人たちです。振り返ってわが身。何時か自分もと言っている間は：駄目ですね：反省。今年がいい一年でありますように。

大和 定次

昨年は、本邦初といわれる『音の百科事典』（丸善）の「ラジオ・テレビの効果音」の項目を担当、秋には『爆笑チュー問題』という番組で爆笑問題と共演。彼らの洞察力と反応は素晴らしく、大いに刺激を受けましたが、CS有料放送のため、ほとんどの人に見てもらえませんでした。

牧之瀬恵子

HAPPY NEW YEAR!! 2007
Bonne et heureuse annee!!

あけましておめでとうございませう。セへボクマニバデュセヨ。

お元気でございませう。いらつしやいますでしょうか？

「ごゆっくりお正月を楽しんでいらつしやることと存じます。」

私ことではありますが、本年は韓国延世(KONSEI)国際大学院の交換留学でフランスのグランゼコール・パリ政治学院(Sciences Po)のジャーナリズム学科で学ぶことになりました。

また夏休みには、ブリュッセルのEU委員会本部で、ヨーロッパのメディア政策に関する研修に参加致します。

来年には、日本に戻りますので、その際にはまたどうぞよろしくお願い致します。すばらしい一年をお過ごし下さい！！

（日韓中フォーラム協力者）

07放送人グランプリノミネートのお願い

今年も「放送人グランプリ」ノミネートの季節になりました。ノミネートの要領は例年と同じです。よろしくお願ひします。贈賞の対象は、主として06年4月から07年3月までの1年間で、テレビ・ラジオの企画・制作・演出、技術・美術などのスタッフ、編成、調査、研究、評論など放送に関わる活動のなかで最も顕著な仕事をしたと思われる人。

- 1、候補者は、グランプリ候補1名（個人またはグループ）とその推薦理由。ほかに贈賞したい人（またはグループ）の名前、理由、適当と思われる賞のネーミング（特別賞、奨励賞など自由にお考えください）。
- 2、締め切りは07年3月31日。放送人の会事務局（FAXまたは郵送あるいはメールでお送りください）。
- 3、ノミネートすることができるのは、放送人の会会員に限りませんが、対象者は会員に限りません。出身母体やジャンルなどにこだわらず広い視点でお考えください。
- 4、選考は、ノミネートの結果をもとに、選考委員の討論で内定し、幹事会で承認という例年通りのプロセスです。
- 5、5月の放送人の会総会と一緒に贈賞式を行います。

鶴沼海岸から 23

名誉会長 川口幹夫

傘寿の新年

「これが最後の年賀状です。傘寿となりましたので賀状の出し納めといたします。」二人の友人から相次いで来た年賀状だ。

思えば長い間、賀状を書き続けてきた。戦中戦後を含めておよそ六十数年、毎年毎年、よくも書き続けたものだ。初めはいつ何時、若くして死ぬのかを覚悟した。戦場から帰ってからは新しい希望の年だった。

テレビの仕事については、毎年が新しい仕事をこなすことだった。なすことすべてが新鮮だった。新しい年に又新

しいことを始める。その繰り返しだった。思えば何という幸せな日々だったことか。

その長い長い年月が過ぎ去ってみると時代はガラリと変わっていた。テレビはずっかり鮮度を失っていた。大量生産、大量消費の象徴になっていた。

一方で、その時代を生き、激しくエネルギーを消費してきた私達も又、むなししい使い古しの、使い捨ての「なきがら」同然になっていた。

二十代の若者だった私たちは、そろって七十台とか八十台に突入していた。その年代になってみると、もはや新鮮なものは殆ど産み出せない。ポンコツになっていたことをはっきり自覚したのだ。

だから私の友人二人は、この正月に「賀状の出し納め」を宣言したのだ。私

達テレビ人、特にテレビ第一世代といわれる人間は、なかなかそのことを認められない。

だがここはもう観念した方がいい。何しろ時代が変わった、ということとは、人も変わったし、人の心も変わった、ということなのだ。

くやしいけれども、もはや我々の世代では新しい時代を作れなくなっている。「くやしいけど、ここは新しい世代におゆずりしよう。」そして若い人たちが見せてくれる新鮮な視点に、発想に、表現に溢れるような拍手をおくろう。

そして時に声を大にして彼らを讃えよう。「うまい！素晴らしい！よく考えたい！思い直してみよう。我々も昔はそれなのだったのだ。」

拜啓 放送局団塊世代様

機首編SPの「女子アナNG大賞」で登場した某局女性アナの場合……
「ニュース原稿の「団塊世代」の「塊」が「魂」に見えたか、思わずダンコン世代と誤読した！（爆笑）。男根いや定年まぢかの放送界団塊世代諸君、現在70歳前後の焼け跡蘭市青春派の裨尾を飾ったわれら先行派（放送人の会メンバー）の話も聞いてくれ。

平成の大不況下、とりあえず子会社の囑託に応募するか、いつそ退職金を持ち寄り、仲間と企業を立ち上げるか趣味道楽の道でまぎらわすか、書き溜めた演出ノートをまとめてアテの無い本作りに励むか、それとも帰郷して家業の手伝いか墓守りに甘んじるか、果ては高齢者事業団に登録し駐輪場整理係に身を落とすか……ロクでもない老後の影におびかされていたもので……
団塊世代諸君、見果てぬ老後の夢にあきたらないのが放送関連の諸君であろう。今、諸君の間で「ノーブレス・オブリージュ」が流行語となっていると聞いた。そりゃそうで後輩の団塊ジュニア社員からは「年金食い逃げ族」と怨嗟の的となっており、ならば「貴族の義務」を果たそうと目下沈黙考中とのことだ。だったらわれら「放送人の会」があるではありませんか。この団体こそまさにノーブレス・オブリージュそのものを具現する団体なのです。志しある諸君の入会を切に望む。（M）

題名のないエッセー

磯村 健二

第五回「音楽も報道番組か？」

前回、私が一番長く携った「題名のない音楽会」について書いたが、勿論それほどばかり担当していたわけではない。ほぼ同時期にスタートしたベストテン番組の誕生から衰退までの約十年間がある。おりしも一九七〇年代はカラー化の時代であると共に、視聴率競争の激化の時代であった。音楽番組であっても二桁の視聴率が要求された。

「光子の窓」「夢で会いましょう」等に代表されるTVミュージカルは「シャボン玉ホリデー」を経てバラエティー化されていく。かたや「ザ・ヒットパレード」が原型となり各民放はゴールデン八時台でベストテン形式の生番組でしるぎをけずることとなる。

これにはいくつかの要因が考えられるのだが、それまでの歌謡界は演歌全盛の序列時代であり、レコード各社やナベプロ大國をはじめとする大手プロダクションとの力関係において、局独自のキヤスティングなり、構成をすることはかなり困難であった。特に、教育局から転進したばかりのNET（日本教育TV）はいわずもがなの状況にあった。レコードの売上げ枚数や視聴者の支持度によって歌手や曲目を決めることが出来るベストテン形式はこの制約を受けない。

こういうせつぱつまったことに加えて、歌謡曲自体のジャンルの多角化が始まっていたことである。歌手で云えば、いしだあゆみ、小川知子に代表されるアメリカン・ポピュラーの影響を受けた和製ポップス、タイガースに代表されるグループサウンズ、反戦歌から私小説的な内容に変化しつつあったフォーク系のグループ達、演歌ですら森進一や青江美奈などのようにロックやジャズの影響を受けた曲想や唱法が誕生した。ヒット曲自体のバラエティー化である。少し後ではあるが、新生CBSソニーがベストテン番組の誕生を意識してか、ビジュアルなアイドル系歌手の大量生産をスタートする。

この状況下で弱小NETの制作スタッフは二つのタブーに挑戦することになる。一つは「ニュース化、情報化」である。それまでは、歌手の私生活、プライベートは「平凡」「明星」又は「週刊誌」の世界であり、いやしくも格調(?)の高き歌番組で扱うものではないという気風があった。これの逆用である。同時に番組の進行のスピード感、ところ狭しとヒット曲とそれにまつわる情報を詰め込む。ベストテンではなく「ベスト30歌謡曲」はこうして誕生した。

もう一つのタブー破りは映像面である。当時、NETには他局のような大スタジオが存在しなかった。フルバンドやオーケストラのセットを組むといっばいでフルショットも撮れない。そこで苦肉の策、LSではなくUPだけで勝負をしようということになる。あらゆるアン

グル、場合によっては同軸のアングルのUPを何カットも連続で積み重ねる。カットとディゾルブだけでは当然のことながら画は繋がらない。パンイン、パンアウト、複数の急速ズームアウトのカット替わりでの挟み込みを始め、現代の音楽番組ではあたりまえの手法の誕生である。

そんなことで、視聴率二桁維持のこの番組は約十年間他局と戦い続けたわけだが、やがて衰退期を迎え、他局同様、編成表から姿を消すこととなる。

着れるもの久しからず、番組はやがてマンネリ化でききられると言ってしまった。ええそれまでだが、私としては懐かしさと共に、何かうしろめたさから開放された安堵感があった気がしている。

大変僭越ながら、堅固な存在であったテレビドラマもや遅れて同様の歴史があったのではないか。反動期に入っているのであればと願う一放送人のたわごとである。

☆ 会員フリーマーケット ☆

安く売りたいし安く買いたし案内、そろそろ身のまわりを整理しよう。転居でガラクタを処分したい。「蔵書の山はなんとかなりませんの！」とカミさんもうるさい。

お悩みの皆さん、会員同士で「誌上フリーマーケット」を作りませんか。該当する物品の売買を希望の会員は、物品名と会員名を書いて事務局までお申し出ください。誌上PR記事を掲載しますので、広報まで一報を。

放送界徒然草(第一段)

キー局ものはづけ

テレビ局を花や植物で譬えてみると何と答える? ◆まずNHKは野菊と出た。ここは芸術祭の秋などには群生して一斉に咲くが、小ぶりで目立たない、第一地味で気にとめる者は少ない。「老人は愛でるが、そこらのアンちゃんやメスザルからシカトされる寂しい花だ」◆だから大輪の派手な新種がして神南はもがいてる」「といて裸まがいは誤解されたし...」◆日本テレビは? 一本に必ず一輪咲かせる福寿草か金鳳花の類いだらう。ここは、一本は本編だが今一本は巨人中継。あわせて「二本テレビ」だから。「しかし巨人低迷の今日びは新しい一本探しに一所懸命...」◆ならばTBSだが、即座に薔薇の花と出た。ここは綺麗だがトゲがある。派閥の内紛が絶えないから。「今はそうでもないだらう、いっそトゲある薔薇が咲き乱れたアン頃が懐かしい」◆フジテレビはもう向日葵っきゃない。湾岸の荒地地に群れるヒマワリは一斉に太陽に向いて咲きアッチむいてホイ的社員はいないのは結構だが、できればいつまでもほったらかし埋め立て地を何とかして呉れ。ウエルカム東京五輪2! ◆テレビ朝日は桜。朝日に匂う桜ばな哉で決まりつつもんだが「ド派手にパッと咲いてパッと散る番組も多い」も一票入る。◆おしまいにテレビ東京はと向けたら苦しんだ挙げ句に、木天蓼(またたび)と返ってきた。ここは「また旅(番組)かい」。たしかに旅番組連打の編成家ではあるわな。(松)

題名のないエッセー

第4回 黛敏郎は「右翼司会者」か？

磯村健二

前回は私と『題名のない音楽会』と

の奇妙な出会いを書かせていただいたが、以来、私は二十七年間この番組に

携ってしまふ。同一人物がこの年月、

同じ番組に携ることも異常であるが、

番組自体が、黛敏郎の死後（そのコン

セプトはいささか変わったにしても）

四十二年目に入る現在もお継続して

いることこそ奇跡的なことであろう。

私は近年、「長寿番組の秘訣は何？」

との質問を公私にわたりよく受ける。

その度に「一社提供のスポンサー（出

光興産）のお陰です」と答える。

まさにその通りである。

ただし、この場では「企業メセナ論」

ではなく、番組のコンセプトなり造り

方をいささか手前味噌ながら分析して

みることにする……

番組のスタート当初から公開番組の

入場整理券の裏に印刷されていた短い

文章がある。

『あなたは音楽が好きですか？嫌い

ですか？音楽なんてなくなったら人生は

成り立つと思っていますか？この番組

はそんな人たちに贈る番組です』

番組の創始者の一人、指揮者石丸寛

はクラシック音楽の大衆化をテレビを
通じて行おうと考えた。一方、作曲家
黛敏郎は音楽を使って新しいジャンル
のTV番組を作ろうと考えていた。

この「啓蒙精神」と「革命精神」は

ときとして融合することもあったが、

むしろ常に対立し、その制作現場で生

じる緊迫感忘れられることができない。

石丸寛氏はスタートから数年して番

組を離れ、独自の活動を展開すること

となる。

音楽は社会を離れては存在しない。

文化全体はもちろん、政治や経済、

社会の動きの中で音楽は成り立ってい

るといふ論点が黛の語り口の原点だっ

た。このことは当然、「君が代」「日

の丸」問題に代表される右翼的番組と

して喧伝され、局もスポンサーも頭を

痛めた。収録後、放送中止した番組で

すら数本はあったほどだ。

「黛敏郎って右翼だったのですか？」

これも私がよく受ける質問である。確

かに作曲家 黛敏郎は日本の洋楽のイ

ンターナショナル化のリーダーながら

日本とはなにか？ 仏教とは？ 神道と

は？ 天皇とは？ 平和憲法とは？と徹

底的につきつめた人である。だが私は

そのことと番組上での発想、発言とは

直接結びついてはいなかったのではな

いか、という気がしている。黛にとっ

て『題名のない音楽会』とは、過去の

テレビ番組の様々なタブーに挑戦する
実験であった。もし世が世であったな
ら、もしかして左翼でもよかったので
はないだろうか？ 放送上の公平の原
則の限界を黛は良く知っていた。

タブー破りは色々ある。演歌歌手が

クラシックを、またその逆を、オーケ

ストラが和服で演奏したら？ いままで

は何でもないことだが、演歌歌手は自

分の持ち歌しか歌わない時代に、私は

じめスタッフのキャスティングに要す

る労力は筆舌に尽くし難い。収録時に

大演奏家がミスを犯しても、美術セッ

トが倒れても決して取り直しをしない

でそのまま放送する（すでにVTR編

集が可能な時代に）。このことがいか

に生放送にも優る臨場感を生んだこと

か。また徹夜の企画会議はあたりまえ

既に錚錚たる大監督たちの映画音楽を

数百本も経験済みの黛は、尋常のコン

テでは納得しない。裏の裏のそのまた

裏を考える黛の思考について行けず、

ノイローゼになったディレクターもい

た。視聴率が二桁になったら私は降り

ると豪語し、いかにも黛らしい逆説で

周囲を煙に巻き、悩ませました。

要するに、この番組のスタッフにとっ

ては「テレビだから」「時間がないか

ら」という言葉は辞書になかったので

ある。再三、手前味噌めくがこの番組

というか、黛敏郎のプロデュース感覚

は二十年先を行っていた気がする。

「題名のない……」修羅場をくぐった

私が、いかに他の番組を作るときにギャ

ップを感じたか、それは次回に書く予

定である。……………（つづく）

☆ 新刊紹介

『日本テレビとCIA』

〜発掘された「正力ファイル」〜
有馬哲夫著（新潮社）

ワシントンの国立公文書館で有馬教

授は「CIA文書正力松太郎ファイル」

を発見する。朝鮮戦争以後、冷戦状態

の中でアメリカが北東アジアへのマイ

クロ波多重通信網を計画、軍事的意図

につつまれた極東メディア構想のなか

で花開いたのが日本テレビ放送「網」

だとし、その実現過程に迫る文脈に興

奮を覚える。米国の世界戦略をテレビ

網とからめて捉えた書である。

◇ 昔ここにラジオがあった

〜四谷村物語〜（東洋書店）

QRラジオマングループ編著

四谷に局舎があったラジオ局が浜松

町移転を契機にOBたちが回想したい

わば放送現場史。「社史」と違い、草

創期のエピソードの数々に「体温」が

あり、笑わせ泣かせる。民放ラジオは

生放送ワイド以前にパッケージ積み重

ね、録音テープ編成時代があった。そ

こに演劇、映画、出版、教師、NHK

レッドページ組、通信社や業界紙記者

などが集結。てんやわんやで始まった
狂乱時代を語り紡ぐ書。 (M)

構成 久野浩平

今回はドキュメンタリー、ドラマ、報道の分野で異色な手法で変革を試みた方々の「証言」を集めました。

まず 吉田直哉 さんです。吉田さんは一九五三年NHKに入局、師事していた加藤道夫さんから「ラジオドラマをやるな、外へ出ろ」とアドバイスされました。やがて武満徹、富田勲さんたちの協力を得て「音の四季」「マイククロフォンのための詩集」など前衛的な音響構成を作り、五六年にテレビに移り、録音構成の手法をテレビに応用したフィルムドキュメンタリー「日本の素顔」をスタート。主題は日本人論でした。「日本人と次郎長」「ある玉砕部隊の名簿」など数々の話題作に関して羽仁進氏との論争に触れ、吉田さんの「証言」は熱を帯びます。六三年にドラマ部門に転じ、「魚住少尉命中心」「恐山宿坊」などのフィルムドラマを経て、「大閤記」(六五年)「源義経」(六六年)と、連続して演出した大河ドラマの話題が続きます。後の「明治百年」「太郎の国の物語」「未来の遺産」など、吉田さんの「証言」の世界は豊かです。

「当たるともう、男の俳優さんほどんだん大きくなって行くし、女優さんはみるみる美しくなっていますよね。こっちも得意になって乗って行くし、育って行く(中略)それはドキュメンタリーにはない点で、連続ドラマにしかない魅力でした。」

山崎俊一さんは五五年、NHKに入局、岡山局に配属、五九年AK社会

教養部に移動。ラジオ・テレビ兼務で録音構成とフィルム構成を作り、六四年フランスに留学。帰国後ヒューマンドキュメンタリー「ある人生」のシリーズで二三本の作品を制作、サリドマイド児の親子の健気な生活を記録した「予期せぬ情況」はアジア放送連合大賞を受賞。そのあと山崎さんの「証言」は、七〇年の芸術祭大賞作品「Uボートの遺書」の企画、調査、撮影、海外取材など制作の経緯を詳しく語ります。八七年NHKエンタープライズに移ってから「ファール昆虫記」と、山崎さんのドキュメンタリーの歴史は多岐にわたります。

「仲間うちで議論したのは、やっぱり

り情況なのか人間なのかという、人間の本質に傾斜するのか、人間の置かれている社会的状況を強く打ち出すか、それが宿題だったように思いますね」

次は 福富 哲 さんです。福富さんは六一年NET(現テレビ朝日)に入社し、七六年制作局で連続ドラマのプロデューサーを勤めながら社会性の強いドキュメンタリードラマを志します。

外務省の機密漏洩事件(原作 沢地久枝)から「密約」(七八年)をドラマ化、テレビ大賞を受賞。続けて七九年、本田靖春さんの「誘拐」を原作に制作した「吉展ちゃん事件」は大きな反響を呼び、再びテレビ大賞や芸術祭の賞も受け、実録ドラマのブームを起す契機にもなりました。福富さんはノンフィクションドラマの企画、制作の裏面やトラブルも率直に語り、ドキュメンタリーとドキュメンタリードラマ、そしていわゆる再現ドラマとの差異などの議論にも言及します。

「僕はあの、何もかも全部やろうという風には思わなかったんですよ。やっていいものと悪いものと僕なりにちょっと(こだわりが)あったんですよ(中略)善良な市民ぶってるが、ひょっとしたら我々だってやりかねない。犯罪人の内面には何かが重なってるだけだ、と僕は当時思っていてそれじゃその、人間の視点でやってみよう」と。

今度は 藤井 潔 さんです。「テレビはなにものなのか。何ができるか」を主題に一貫して問い続ける藤井さんは、五八年NHKに入局、科学産業部で公害や自動車をめぐるユニークなドキュメンタリー「追突」「高速」などを制作、七五年から「NHK特集」プロジェクトチームの中心メンバーになります。「NHK特集」は組織内部のセクショナリズムを打破して映像の可能性を追究し、クロスカルチャーの実現を目指す画期的な番組でした。企画の自由、編成の自由、予算の自由を保証した当時の放送局長堀四志男さんの思い出話に始まり、藤井さんの「証言」の殆どは「NHK特集」についてです。VTRやENGの機能を発揮した「氷雪の春」オホーツク沿岸飛行「静かなドキュメンタリー」「永平寺」(イタリア賞)「核戦争後の地球」など七百年の番組を手掛けた。

「ぼくがずっともっていた考えは、「非」という思想なんです。非安定という思想です。要するに組織、クリエイティブな集団は安定したら終わりだ。いつも何か刺激があって不安があって、それがあってはじめてクリエイティブになるんだ。これは不安定ではないんですよ(中略)ぼくのは「非」なんですすよね、非安定なんです」

最後は 磯村尚徳 さん。磯村さんは五三年NHKに入局。報道局外信部に所属、翌五四年フランス・インドシナ戦争に従軍記者としてただ一人、デンマークで取材に赴きます。五八年イラク革命では中東特派員として、そのあとカイロから直接パリへ、ヨーロッパ総局の記者になります。七三年外信部長のまま秘密裏に北ベトナムに入り、「桃の花咲くハノイから」のルポルタージュは話題になりました。七四年に「ニュースセンター九時」がスタート。NHKニュースの抜本的改革をめざしてキャスターに起用されます。磯村さんの「証言」では、ニュースの項目順、表情、服装、テレプロムプターの功罪などさまざまな問題点に触れて行きます。キャスター降板直前、ロッキード事件で保釈中の田中首相を見舞い進退問題に追い込まれたNHK小野会長事件を、個人判断で番組の中で謝罪した磯村さんの決断の経緯は興味深いものがあります。

「テレビのこわい所は、ラジオと違い視聴者は、コイツがどんな奴か、みんな本能的に見抜いていますからね(中略)どんな名アナウンサーでも例えば、外国のニュースにしてもそれは他人様が書いた原稿を読んでいるだけですからどんなに読み手が上手でも、どこか嘘っぱちめいて、ほんとは見えない所があるわけです」

◎ 事務局新人紹介

佐藤真美子さん 尚美大音楽情報学科卒 現在はTBSラジオ&コミュニケーションズでフリー勤務。PC業務の達人です。今後ともよろしく。

会員名簿 06・11・26現在

- (あ) 合川明 青木裕子 赤井朱美
 秋田完 新井和子 有馬哲夫 (い)
 石井清司 石井ふく子 石井彰
 石高健次 石橋冠 磯野恭子
 磯村健二 市岡康子 一色伸夫
 伊藤雅浩 井上良介 岩澤敏
 岩下恒夫 (う) 上田千秋 碓井広義
 歌田勝彦 宇野昭 浦田彰 (え)
 江口展之 遠藤利男 遠藤ふさ子
 (お) 大蔵雄之助 太田敬雄
 大野木直之 大西康司 大西文一郎
 大原誠 大原れいこ 大山勝美
 大類啓 大脇明 岡弘道 岡崎栄
 岡田晋吉 緒方陽一 岡村黎明
 沖野瞭 荻野慶人 小田昭太郎
 小田久栄門 (か) 加賀美幸子
 各務孝 片岡敬司 片島紀男
 勝部領樹 加藤滋紀 加藤静夫
 金沢敏子 兼歳正英 金平茂紀
 加納孝夫 上安平冽子 鴨下信一
 河合 肇 川口和久 川口健一
 川口幹夫 川竹和夫 川平朝清
 河邑厚徳 河村正一 (き) 岸田功
 北川泰三 北川信 北出晃
 北村美憲 北村充史 木村栄文
 木村成忠 木元教子 (く) 楠美昌
 工藤英博 (こ) 小池勝次郎
 河野尚行 児玉久男 児玉孝光
- 後藤和晃 小中陽太郎 近藤晋
 今野勉 (さ) 斎藤伸久 斎藤守慶
 斎藤秀夫 斎明寺以玖子
 酒井美樹男 寒河江正 坂元良江
 桜井均 桜井元雄 迫田朋子
 佐々木欽三 佐々木彰 佐藤年
 佐藤利明 沢口真生 澤田隆治
 沢田隆三
 (し) 重延浩 静永純一 渋谷康生
 嶋田親一 清水満 下川靖夫
 下重暁子 習田豊 城菊子
 (す) 菅野高至 杉澤陽太郎
 杉田成道 鈴木克明 鈴木昭典
 鈴木道明 鈴木紀郎 鈴木典之
 須磨章 せんぼんよしこ
 (そ) 曾根英二 (た) 高島秀之
 高橋一郎 高橋啓 高橋泰 滝大作
 武谷雅博 田澤正稔 只野哲
 田中昭男 田原英二 田原茂行
 (ち) 千葉勉
 (つ) 露木茂 鶴橋康夫
 (と) 土居原作郎 戸田桂太
 外崎宏司 富永卓二 土門正夫
 (な) 中崎清栄 中澤忠正
 中島僚 中田美知子 中谷英世
 中津川輝夫 長沼士朗 中村敦夫
 中村克史 中村季恵 中村耕治
 中村美美子 難波秀哉
 (に) 西川章 新村もとを
 西ヶ谷秀夫 丹羽美之 (の) 野崎茂
- 野田宏一郎 信井文夫
 (は) 萩野靖乃 橋口義春 橋本潔
 林勝彦 林健嗣 林裕史 原由美子
 原田庸之助 (ひ) 備前島文夫
 久野浩平 一杉丈夫 (ふ) 深町幸男
 福田雅子 藤井潔 藤井チズ子
 藤代勝博 藤田晋也 藤久ミネ
 (ほ) 星田良子 堀川とんこう
 (ま) 松尾羊一 松田輝雄
 松平定知 松前洋一 松本明
 松本修 松本国昭
 (み) 三上義智 三国章 水上毅
 水野憲一 満島保夫 三村景一
 三村千鶴 宮川鏡一 宮脇敏雄
 明神正
 (む) 村上光一 村上憲男
 村上雅通 村上佑二 村木良彦
 村田亨
 (め) 銘苅栄昌 (も) 諸橋毅一
 (や) 八木康夫 矢島良彰
 藪内広之 山県昭彦 山崎隆保
 山崎裕 山路家子 山田良明
 山田尚 大和定次 山名光紀
 山根基世 山辺麻未 山本恵三
 (ゆ) 湯浅和憲 (よ) 横沢彪
 横山英治 吉永春子 吉村直樹
 吉村誠 吉村光夫
 (わ) 和田智允

お断り連載『ラジオの広場』は日韓中
 特集のため、休載、冬号にまわしました。

編集後記

百済路にメディアの人や何思う
 試みに地球儀を回し、ユーラシア大陸を機軸にして眺め直すと、沖縄から北海道まで列島弧は三日月状に横たわっている。この細長い島嶼にメラネシアに続くヤポネシアを想定し、大陸往還の宿命と運命による相克史から日本の国家的性格を解放する仮説を試みたのが島尾敏雄だった。柳田國男が「海上の道」で描いた南冥のロマンに巨大な漢語圏を架橋する作業。放送と通信のメディアは今、島尾敏雄が夢想した磁場の共有化に最も近いところに居る。その道作りの手掛かりの一つが「光州行」の本質なのかも。朝霧畑の長距離バスから高麗の田園を眺めながら、そんなことを考えていた。(松尾生)



順天市楽安邑城
 民俗村を見学す。

第4回会員ミニ・シンポジウム!

『鴨下信一さんを囲む会』
 主題 「カメラ割り」という
 呼び方は旧いかな?

☆ 12月14日(木) 15時〜17時
 クラブジャパン(新橋豊島ビル2F)
 ☎ 343211500 詳しくは事務局
 局にFAXで地図を請求して下さい。
 肝入り 中澤忠正

会費 千円 (ただし、二部のミニ・シン
 ポ忘年会希望の向きは追加二千円)